

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	鹿児島修学館中学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	「自分で考えたい・表現したい」生徒を育む特別授業
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>1. 活動にいたる経緯</p> <p>中学1年で取り組む国際バカロレア教育の学際的単元(美術と英語)で、海外の方々との交流時にも使える自己紹介カードを作成する。2021年度から継続している実践であるが、現在の中学2、3年生もコロナ禍の影響で実際の交流ができなかった。今年度は単元の途中で地域のイラストレーターやデザイナー、漫画家の3人によるワークショップ形式の特別授業を計画している。ここ数年、カリキュラムマネジメントを意識して、この美術と英語の学際的単元だけでなく、他の教科や学年との学びのつながりも少しずつ生まれてきており、さらに促進したい。</p> <p>2. 活動・研究の目的（ねらい）</p> <p>現在 AI をはじめとするテクノロジーが急速に進歩しているなかで、生徒たちが自分自身で考え・創る楽しさや喜びをもっと実感し、その意義や価値を再構築したい。上記の単元で昨年度までに生徒たちが作成した自己紹介カードを見ても、オンライン上のテンプレートに少し手を加えただけで、「自分で創った」とは言い難いものもある。生徒たちには、AI などのテクノロジーがあっても、「それでも自分で考えたい・書きたい・描きたい・創りたい・表現したい」と思うような課題や機会を与え、そのような気持ちを高めていきたい。</p> <p>3. 活動内容</p> <p>(1)対象者：中学生各学年生徒(255人)</p> <p>中1、中2、中3それぞれの学年で実施。</p> <p>(2)時間：主に総合的な学習の時間</p> <p>(3)ねらい：</p> <ul style="list-style-type: none">① 生徒が「自分で考える・表現する」楽しさや喜びを実感する。② 生徒や教員が「テクノロジーと人の力との融合・共存」の在り方について考える。③ 生徒が学際的単元の探究テーマを探究し、「アイデンティティ」についての概念理解を深める。④ 学んだことを他の教科や他の場面で活かす「転移スキル」を高める。	

(4) 活動の特色:

- ① 地域で活躍するイラストレーター・デザイナー・漫画家の3人によるワークショップ形式での特別授業で、生徒が「自分で考える・表現する」楽しさや喜びを実感する。同時に、イラストレーターなどの仕事の実際に触れ、生徒たちが将来社会で働く際にも課題となるであろう、これからの時代の「テクノロジーと人の力との融合・共存」の在り方について考える。
- ② 単元を通して、「アイデンティティは、自分自身と自分自身が生み出すもの、それらを解釈する受け手によって形成される」という探究テーマを意識して学ぶことによって、「アイデンティティ」という概念についても理解を深める。
- ③ 総合的な学習の時間に実施することで、複数の教員が関わることになり、生徒がこの時間に学んだことを他教科でも活かし、生徒の「転移スキル」を高めることを意図する。(社会科地理分野(旅行パンフレットを作成する課題)、デザイン(技術)でのポスター作成、中1・2合同総学でのスライド作成等。)
- ④ 事前展示・事前ワークシートを活用して生徒の興味を喚起し、前後の教育活動をつなげる。

(5) 活動時期および内容

- 6月(17日土曜日)・・・中1向けワークショップ形式特別授業
 - 11月(25日土曜日)・・・中3向けワークショップ形式特別授業(Qball(キューボール)使用)
 - 2月(10日土曜日)・・・中2向けワークショップ形式特別授業(Qball(キューボール)使用)
- ※各回ごとに、2週間ほど前から事前展示・事前ワークを実施。講師が毎回、書下ろしのイラスト等を展示したり、生徒が事前ワークで取り組んだものを展示したりして、当日はフィードバックも交えてワークショップを進めた。それぞれの学年ごとに講師も工夫・改善し、各回、アプローチの異なる特別授業となった。
- 通年で、「自分の考え(生み出したもの)と他者の考え(生み出したもの)」の区別をはっきりさせ、「自分が考える」ことを求める「学問的誠実性」の重要性を伝え、適切な引用の仕方などを身につけるよう指導した。(全学年の全教科で、レポート課題や創作課題を課すたびに指導する。)
 - 12月と2月、地域の人々との連携や教科横断的な学びを実践しており、本校と同じ国際バカロレア校である「岡山県朝日塾中等教育学校」「広島県立広島叡智学園中学校」「高知県立高知国際中学校高等学校」や高知県「香美市立香北中学校」などを視察した。それぞれの学校で、生徒が「自分で考えたい・表現したい」と思って取り組むような課題を設定し、探究を促し、学ぶ力を育成しようとしていた。各教科で生徒が作成した成果物を展示している学校も多く、本校でも取り入れることのできる点を学ぶことができた。

4. 子どもたちへの効果(成果・課題)

- (1) 生徒の「(AIなどのテクノロジーに安易に頼り過ぎず)自分で考えたい・表現したい」という気持ちが高まり、生徒も教員もこれからの時代の「テクノロジーと人の力の融合・共存」について考える機会となった。
- (2) ワorkshop形式特別授業当日だけでなく、前後の教育活動や他教科につなげることで、生徒が学んだことを他の教科や他の場面で活かす「転移スキル」を高めることにつなげることを意識できた。
- (3) 学校・教員側の立場としては、生徒が「自分で考えたい・表現したい」と思って取り組むような課題をどのように作成するかについて、他校の事例を見たり、他の分野での地域の方々との連携をしたりすることによって、知見を得てノウハウを蓄積することができた。